

前回は、安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎がカムイコタンを踏査し

た記録から、「シキウシバ」荷物背負場の検討をした。今回は、まず、本連載の④でも紹介した、松浦武四郎より十六年後の明治六年に、カモイコ

タンを二度往来した平林通恪の『北

海紀行』で、シキウシバを見ていこう。

「入ハ皆、ワラモイ(註)掲載図のパ

ラモイ para-moy 広い・湾)ヨリ上陸シ、荷物モ亦陸ヲ運ブ。道路アリ、岩上ヲ歩ス。此難所ヲカモイコタント云フ。(註)傍線は、平林のアイヌ語

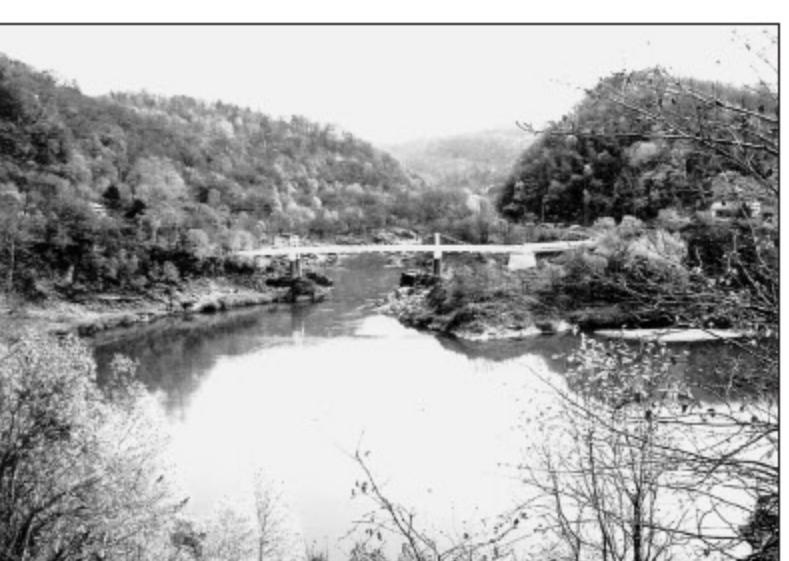
地名表記法)

掲載写真の神居大橋のあるバラモイの左岸の岩場に丸木舟を引き上げ、ここから荷物を背負い、ハルシナイまで約三キロを陸行したことが簡潔に記述されている。これは、前回見

た松浦武四郎のダイジエスト版の『石狩日誌』の右岸シユマチセ(suma-cise 岩・家)は、掲載図のシラツチセ(sirat-cise 岩・家)と同一であるので、シラツチセの対岸がシキウシバという記述と合致している。

年代順に追うと、次は明治二十三年にカムイコタンを調査した永田方正の地名解であるが、次回に紹介する掲載図のポロレプシペ(poro-rep-us-pe 大きい・沖)についている・者=岩)の項で詳述したい。

次は、昭和三十五年公刊の知里真志保の地名解を見る。知里真志保の



神居大橋
パラモイ語地名研究
家の山田秀

カムイコタンの現地調査の前日に荒井源次郎翁宅で、近文のアイヌ古老方に一般的な話を聞き、翌日は、本連載(45)でも紹介したように、門野ネン(penchai-tushi-kote-shi)とクアイヌ長老(エカシ)と石山アツムヤシク(rar)弁才船の綱を・繋ぐ・岩)ー前長老に案内してもらい、カムイコタンの現地調査を実施したという。

①「イヤブテウシ(i-yapte-ush-i)」とされたアイヌ語地名研究を行を依頼され、物を・陸揚げし・つけている・所)ー

いつもそこで荷物を陸揚げする場所の義。神居古潭の吊り橋(註)神居大橋)の下。昔、ここまで海であった時、弁才船(註)弁財船)が来ると、文化神

サマイクルはここから荷物を陸揚げした。

②「ベンチャイトウシコテシラル(benchai-tushi-kote-shi)」(penchai-tushi-kote-shi)ー物を・陸揚げし・つけている・所)ー

揚げした荷物をいつも背負って運んだ所。」

なお、この「船つなぎ岩」の伝説は、更科源蔵の『アイヌ伝説集』(昭和四十六年刊行)にも、近文・石山秋三郎老伝として、「神居古潭の船つなぎ岩」のタイトルで採録されている。また、本連載(45)のクッネシリ(神居山)の伝説も、近文・門野ナンケアイヌ老伝として掲載されている。

③「シケウシ(shike-ush-i)」荷を負い・つけている・所)ー弁才船から陸揚げした荷物をいつも背負って運んだ所。」

時代の実際の「荷物背負場」ではなく、掲載のイラストの「船つなぎ岩」について、そこに神話・伝説が誕生、知里はその伝説を記録したのである。

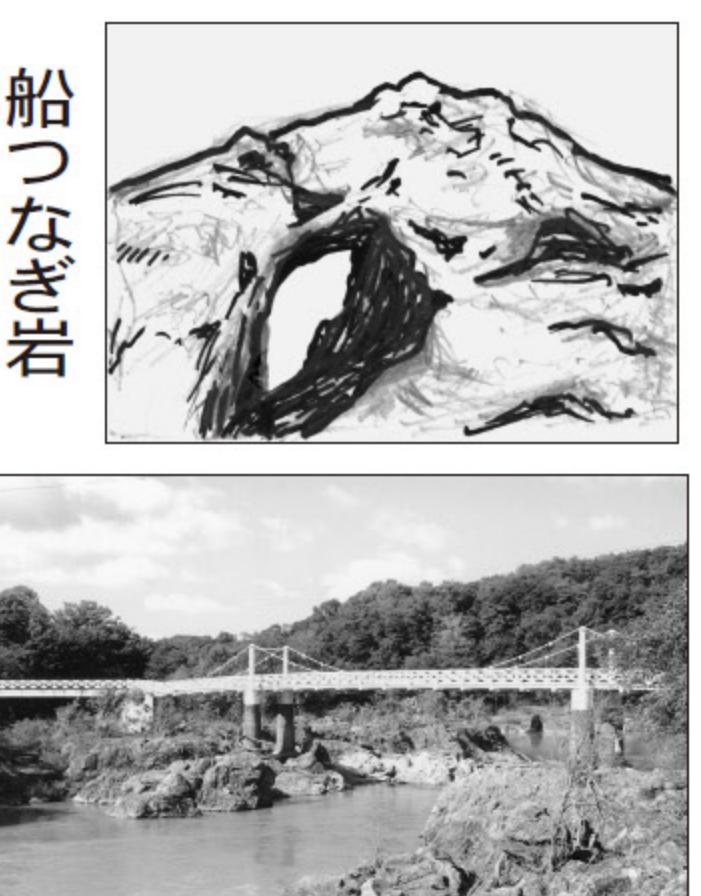
②の「船つなぎ岩」は、神居大橋の写真の左岸中央の橋脚のすぐ下の下流側にあつた。しかし、昭和四十年代に高校生が壊してしまったといふた

だし、諸説あり)。それでは、知里の神

旭川のアイヌ語地名研究

(48)

高橋 基



【現・神居古潭】 右岸上流から見た神居大橋

—旭川のカムイコタン⑤—

知里真志保は、「シキウシバ」荷物背負場関連では、次の①~③の地名解をしている。しかし、往時の丸木舟時代の実際の「荷物背負場」ではなく、掲載のイラストの「船つなぎ岩」について、そこに神話・伝説が誕生、知里はその伝説を記録したのである。

②の「船つなぎ岩」は、神居大橋の写真の左岸中央の橋脚のすぐ下の下流側にあつた。しかし、昭和四十年代に高校生が壊してしまったといふた

だし、諸説あり)。それでは、知里の神